

第三百五十一回 青葉会

平成二十七年六月二十五日(木) 午後五時半〜八時半 丸紅来客食堂(談話室)

〈顧問〉 ☆ 川合万里子 先生

〈選者〉 ◎ 川口孤舟

〈出席者〉

今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 後藤保明 小西弘子

中野一灯 星田啓子 山崎亜也 山内天牛

伊賀山そらお 小早健介 朱牟田恵洲 土谷堂哉 福島正明 古田昇 宮内規雄

渡邊盛雄

赤田堅 安部眞希子 在間千恵 庄司龍平 高橋敏郎 豊田ゆたか 橋口隆 早川允章

福島正明 村田くに子 山崎青史 山本三恵

〈紙上選句〉

《互選句》

七点 ☆◎ 片類へ夏至の夕日や西郷像

(☆:「片類」や「夕日」言葉選びが実到的確である)

弘子 (眞・恭・万・孤・五・ゆ・く)

五点

喜寿はまだ腕白盛り水鉄砲

孤舟 (忠・弘・啓・亜・天)

閑古鳥啼きて木立を深くせり

全 (五・保・灯・啓・三)

提灯の蛇腹伸ばされ祭来る

全 (眞・千・ゆ・く・青)

(青:「祭来る」↓「宵祭」)

☆◎ 処方薬ひとつまた増え梅雨に入る

恵洲 (万・孤・五・灯・三)

(☆:中七↓「また一つ増え」)

☆ 旋盤の切屑匂ふ梅雨の入り

一灯 (万・敏・ゆ・正・三)

(☆:この場合の「匂ふ」は「臭ふ」ではないでしょうか?)

☆ 独り暮し金魚でも飼おうかと思ふ

規雄 (眞・万・弘・隆・正)

(☆:中七・下五が長引いて口語調になってるので↓「金魚でも飼はむか飽きし独り暮し」)

(正↓「独り居や金魚飼ひ度くなる気分」では如何?)

☆ 大阪に静寂はもどり鱧の皮

盛雄 (紀・忠・万・五・敏)

(☆:上五・中七を現実にして「選挙後の大阪閑(しづ)か鱧の皮」)

四点

◎ 結願の高野に出合ふ糸蜻蛉

全 (眞・五・保・ゆ・天)

執心のいまだ消えざる梅雨の月

五郎太 (堅・忠・孤・敏)

☆ 検札の車掌白服白帽で

弘子 (千・龍・青・天)

野仏に一ドル硬貨灼けるたり

一灯 (紀・万・く・天)

(☆:下五が少々仰々しいので「置かれ灼け」)

◎ 梅雨晴間鐵路打ちゆく槌の音

全 (孤・保・啓・青)

父の日や娘に馴染みの店教ふ

亜也 (眞・紀・猛・三)

☆ 真昼間(まつびるま) 酒盃とまらぬどぜう汁

紀久男 (堅・万・隆)

(☆語順を変えて動きを入れたい↓「どぜう汁真つ昼間から盃重ね」)

◎ 梅雨冷(びえ)や飲み屋に気炎の戦中派

全 (ゆ・隆・允)

☆ 夏晴れや隊伍に遅れることも良し

恭延 (孤・隆・亜)

☆ 夏帽子振向くまでの美人かな

忠彦 (猛・万・亜)

(☆語順を変えてみたい↓「美人かな振向かまほし夏帽子」)

捨てるには惜しく思はず枇杷の種

全 (堅・千・正)

◎ 梅雨晴間紋服かけて風通す

五郎太 (保・龍・隆)

太宰忌やカクテルに更け二十五時

一灯 (龍・啓・亜)

◎ アンデスの笛に噴水伸び縮み

全 (孤・五・弘)

梅雨湿り回数券が切り難し

正明 (忠・灯・啓)

巖頭に立つ志士像や夏怒涛

昇 (敏・灯・允)

ぷつくりと浅蜷炊かるる深川飯

啓子 (猛・保・允)

雨蛙猫の如くに顔拭ふ

規雄 (灯・青・三)

二点

☆

雷鳴の止みて頭上にジエツト音(厚木市)

そらお(恭・万)

(☆:「止みて」↓「止むや」)

カツサンド食ひ単衣(ひとこの老妓と芝居見に

紀久男(啓・亜)

薫風に誘はれ妻と墓地さがし

猛(敏・隆)

ふつくらと緑重ねし多摩の丘

全(堅・弘)

山形から変はらぬ友情さくらんぼ

忠彦(龍・天)

紫陽花をたれか手入れの空家かな

全(千・正)

肺活量ありたけ使ひ登山道

孤舟(紀・弘)

バス停の紫陽花一群れ目を癒し

保明(堅・忠)

梅雨空を鴉横切り墨絵めく

全(猛・恭)

田搔き牛背中赤布晴がまし

全(紀・青)

(青:中七・下五↓「背に赤布の晴れがまし」)

(住吉大社・お田植祭)

晴々と浅間日和や花槐(えんじゅ)

弘子(恭・敏)

道変へて一重の薔薇に出合ひけり

全(千・三)

あじさいの色は何色目を病める

健介(眞・恭)

源氏より平家儂き蚩かな

惠洲(堅・紀)

青蘆の背丈越しなる近江富士

堂哉(ゆ・允)

良薬も化学物質甘酒飲む

正明(忠・隆)

青唐や遭はで久しき辛さかな

亜也(紀・龍)

夏燕才オムラサキに追はれをり(季重なり)

全(猛・三)

月島の昭和の喫茶ソーダ水

全(千・正)

雨が止みみみず引つばる蟻の群

天牛(保・灯)

(☆:季重なり。二つ共用いる時は軽重の差をつけること)

紀久男(万)

☆

汗見せぬ軽業(かるわざ)めきし立回り

(☆:「見せぬ」↓「見せで」。「めきし」↓「めける」。この「汗」が季語に該当するか否か:)

問題あると思うが:)

梅雨晴間色とりどりの花を撫で

恭延(堅)

明早し夢騒がしく寝不足に

猛(龍)

庭に蛇幸せの使者と母は子に

忠彦(天)

遠雷にぼんやり外見る日暮れどき

保明(亜)

ゼネラルは夫人同伴ペリー祭

昇(三)

山誘ふ緑に染まりにいらつしやい

啓子(弘)

神宮に傘の華咲くプロ野球

全(く)

開襟てふシャツもありけり更衣

亜也(允)

夏の富士汽関車トーマス会う旅に

天牛(紀)

●次回青葉会

七月二十三日(木)

午後五時半から八時半

(丸紅 コンチエルト)

▲当季雑詠五句

投句二句

八月二十七日(木)

午後五時半から八時半

九月二十四日(木)

午後五時半から八時半

以上文責 紀久男

一 万里子先生から孤舟さんに選者交代して最初の句会。出席12名。投句8名。大好評で皆様へお送りしている先生の選評と添削につき、交代を機に添削を辞退したいとの先生からの申入れについて話題にしつつ、俳誌等回覧し乍ら、そして寄贈の酒等を賞味。全員揃った6時に開始。今回もいつもの猛さんが進行役で、御覧のような成績でした。8時半終了後、先生からの申入れについて協議し、先生の御要望に出来るだけ添えるべく、先生の御負担ならぬよう選句と寸評そして10句程度の添削を引続きお願いしたいこと。顧問か名誉選者として御無理なさらぬ程度に御指導賜わりたいこと、ということことで皆様の御意見が一致しました。

二 皆様全員の意向を踏まえて、先生に選句依頼の拙文を送り、御覧のような選句・添削を頂戴しました。今迄はほぼ全句に亘る懇切な選評、添削でしたが、スペースの関係で勝手にカットして掲載しておりましたこと、皆様には悪しからず御了承願います。尚、先生は傷そのものの後遺症はありますが半年のベッド暮りで体力がいまだ戻らず疲れ易いこと。その内に当会へ投句したい旨、お手紙に認(した)めておられます。先生の体力戻られるよう、そして復帰して頂けますよう、祈るばかりです。

三 回覧①孤舟さんから「俳句界」7月号(「私の自由時間」に2頁:『ハワイアンと句会の日々』と題する孤舟さんの寄稿と写真掲載)「俳句四季」6月号(『精鋭16句』に2頁:松浦加古さんの16句掲載)「爽樹」7月号・「俳句」7月号(『結社歳時記』に「伊吹嶺」35名各1句:一灯さんの句も)②恵洲さんから小生へのFAX(先生の添削と講評御辞退についての御意見。天牛さんの松原秀慶応名誉教授追悼文の感想)③松浦加古さんから小生宛に届いた「野澤節子集」(加古さんの脚注・俳人協会2010年12月発行¥1200)とお手紙(送呈した青葉会300回記念句集などへの礼状)。

四 関係者近詠
寄贈①弘子さんからチョコ・ナッツ②啓子さんからの「百年の孤独」③亜也さんから「鶴齡」
新潟純米吟醸④忠彦さんから「風神」加賀の純米吟醸⑤小生の豆腐味噌漬と「杉勇」山形の夏純生。

牡丹未だ蕾(つぼみ)抱きしめ古寺の奥 万里子 病妻の爪美しや桜貝 規雄
濃淡の花弁(はなびら)びつしり大牡丹 全 「NHK俳句」7月号 西村和子選

亡き友と分けし鈴蘭ふえつづけ 全 春火鉢女の仕切る形見分け 丹野敦雄
纏れつつ真昼の月へ双つ蝶 全 「俳句」7月号 星野高士選

俳友と八十八夜に婚成りし 全 潮騒を子守唄としハイビスカス 孤舟
風立つや実梅落ちつぐ夢うつつ 全 「俳句界」7月号 一灯

朝まだき拾ひ集める落小梅 全 開け放つ溽暑の辻のビリヤード 全
風船の番してひまな展示場 眞希子 「俳句」7月号 一灯

小さな任引き受け過ぎて藤の花 全 土筆野にしばらくかがむ遊行かな 松浦加古
無帽なる牧師に従きて春日傘 全 氣負はずに生きて来たりし花齋 全

残雪の山へ煽らる鴉二羽 弘子 「俳句四季」6月号 16句より抄出 允章
ややありて泣き出す迷子花の昼 全 龍眼の如くに現(あ)れて梅雨の月 全

花冷えのたうとう小雪舞ふほどに 青史 音高く歩の成金や夕涼み 全
白木蓮うすく汚れて毀れけり 全 変化(へんげ)前の淡きを愛ずや七変化 恵洲
しばしばも転びさうにな花見妻 全 運転手の背(せな)の不機嫌梅雨に入る 全

弘うても離れぬ虻のやがて愛(は)し 全 十葉(とくだみ)や戦なき世の白十字 盛雄
年々に歩幅の狭くなる花見 全 改革(へんか)一石投じ更衣 健介

養生の身を励ますや白牡丹 恭延 太平洋船長も水夫(かこ)も更衣 全
被災地へ千年桜贈るとよ 全 手花火の真暗闇に二人きり 紀久男

ペリリュウ島慰霊の旅や春寒裡 全 紀久男
元住民被曝桜に涙ぐむ 全 紀久男